

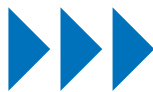
不意苦笑 (Fiction)

— 時空を超えた通話 —

この教科書の4章の著者 平手小太郎



高校生のころの私



現在の私

「雷か？ 近いな。」

2025年8月のある日の夕方、HK氏はつぶやいた。この数分、明らかに雷光と雷音の時間間隔が短くなっていた。窓の外を見ると、先ほどまでは青かった空に、黒く厚い雲が重苦しく立ち込め、今にもHK氏が住んでいるマンションに襲い掛かろうとしていた。

そう感じた直後、ピカッと稲妻の閃光とドーンという雷鳴が同時に落ち、激しい地響きを感じたのと同時に周りが暗転した。『停電か。雷が落ちた？ ブレーカーが落ちただけならいいが…。』と思いながら、HK氏は廊下の分電盤に向かった。蓋を開け、ブレーカーのスイッチを押し上げると、天井の照明が再び点灯した。テレビもPCも無事のように、『電気系統は大丈夫そうだ。』とHK氏はホッと胸をなでおろした。

ただ、よく見るとスマホの状態がおかしい。電源は切っていたはずなのに、画面には電話番号が表示されていた。よく見慣れた神戸の実家の固定電話の電話番号だった。『壊れていなければいいが…。』と念じながら、確認のため、そのまま発信のボタンを押した。

スマホが無事ならば、実家に住む年老いた母親の返事があるはずだ。呼び出し音が聞こえた。『大丈夫そうだ。』と思ったとき、若い男の声が耳に届いた。

「はい、Hです。」

それは、母親の声ではなかった。HK氏は一瞬『アレッ？』と思ったが、介護か家事代行の人が実家に来ており、たまたま母の代わりに受話器を取ったのだろうと推理した。

「もしもし、Hさんのお宅で間違いないですか？」

とHK氏が確認すると、

「はい。間違いありません。」

と電話の向こうの若い男の対応があった。改めて、

「私はHKといいまして、そちらのHの家の息子です。千葉の自宅からかけています。母は居ますか？」

とHK氏が挨拶すると、沈黙が数秒続いた。『どうした？ 絶句している…？』と思ったところ、おも

むろに若い男からの返事があった。

「私もHKです。この家の息子です。一体あなたはどなたですか？なぜ僕の名前を名乗るのですか？」

思ってもいなかった若い男の返事に、HK氏も絶句した。『電話の向こうもHK？何？何事？』この事態に戸惑ったものの、すぐに1980年代半ばに大ヒットした“Back to the Future”という映画の中での、落雷のエネルギーで時空を超えるシーンを思い出した。『私の名前で同姓同名の可能性は非常に少ない。もしかしたら、時空を超えてしまったか？過去の私と通話しているのかも知れない。』と状況を整理すると、HK氏は、相手の質問を無視し、

「すみません。そちらは今、何年何月ですか？」

と改めて時間を確認するための質問をした。

「今は1970年8月ですが…。僕の質問に答えてください。何ですか？おかしな方ですね。もう電話を切りますよ！」

と若い男が電話を切ろうとしたので、HK氏は慌てて、

「お願いだから、切らないで。ちょっと待ってください。お願いします。」

となだめ、その場をしのいだ。

HK氏は、この短い間に、『1970年は前の大阪万博のあった年だ。私が高校1年の年だ。55年前か。』と状況を頭の中で計算した。そのあと一旦、深く呼吸し、『落ち着け。』と自分に言い聞かせ、

「今こちらは2025年なのです。私は55年後のあなた自身だと思います。おそらく、あなたは55年前の私…。」

とHK氏は、この短時間で構築した自身の見解を述べた。すると若い男は、

「何ふざけたことを言ってるんですか！いい加減にしてください。本当に切りますよ！」

と気色ばんだ。

「待って、電話を切るのは待って、私の話を聞いてください。ふざけてなんかいません。私もびっくりしていますが、本当みたいです。」

「どういうことですか？」

「何故だか分かりませんが、2025年のHKである私から1970年のHKのあなたに電話が繋がったみたいです。」

「何ですって！信じられない。」

「私も信じられません。ただ、おそらく間違いはない。だったら、これが本当であることを証明しましょう。何かあなた自身のことについて質問してください。あなたは昔の私なので、あなたのことについては、記憶に残っていれば、何でも答えられます。」

若い男は、ちょっと思案したようだったが、

「それでは、僕の嫌いな食べ物は何かですか？」

と問いかけた。すると、

「鶏肉、チキンです。理由は分からないけれども、絶対に食べません。」

とHK氏は即答した。

「当たっています…当たりだ。」

凶星だったので、若い男は多少驚いた口調になったが、

「まぐれ当たりということもありますからね。それでは、今、私が好きな子は誰ですか？」

と思いついた質問の二の矢を放った。

HK氏は、『高校1年の時は、あの子で決まり…。』と思いながら、

「XXさんですよ。クラスは違うけれど、この夏の淡路島の臨海合宿で気になった子ですよ。」

と自信をもって答えた。

「エーッ!？」

と若い男は驚愕したように唸った。XXさんのことは誰にも打ち明けたことがなかったので、本人以外知るはずがない情報だった。

「合っています。信じられない。誰にも言ったことはないのに…。」

おそらく若い男は、混乱しながらも、この事態を理解しようと努めているのだろう。しばらく会話はとぎれた。HK氏は、『その後、XXさんとは同じクラスになり告白したが、結局振られる。』と言いつつになったが、『これを口に出すのはやはりまずいな。』と何とか思い留まった。

不思議な沈黙が続いたあと、電話の向こうのHK君から、
「分かりました。嘘じゃないみたいですね。あなたの言うことを信じましょう。何故このようなことが起きたのですか？」

との質問があった。HK氏が、『昔の私に敬語は不要だ。』と決め、
「私にも分からない。落雷によりスマホに異常があって、時空を超えた通話になったようだ。」
とタメ口で答えると、

「スマホって何ですか？」

と早速HK君が尋ねてきた。HK氏は『1970年ならスマホなんて夢の夢だったな。』と思い、

「スマートホンの略で、手で持てる小型で高機能な電話機のことだよ。」

「電電公社のパビリオンで展示していたものですか。あれが実用化されたのですね。テレビ電話も普及したのですか？」

「大阪万博の話だよ。スマホはそれよりずっと小さくなっていて、高機能になっているよ。テレビ電話は迷子の確認で使っていたと思うが、固定電話だったよね。今のスマホにはテレビ電話の機能もある。大きさは手帳の大きさ位だよ。」

「ヒエーッ！ そんなコンパクトになったのですね。」

「そちらは大阪万博の最中だよ。実はこちらでも大阪万博をやっているんだ。55年後のものだけだね。」

「そうですか。」

「それから、今回の大阪万博のパビリオンを見て建築に興味を持ったよね。特にスイス館の光の木のような建物が印象的だったはずだよ。」

HK氏が言うように、1970大阪万博は、HK氏が最終的に建築学科に進学するきっかけとなる出来事だった。

「そうです。その通りです。」

HK君の声ははしゃいでおり、自分の気持ちを言い当ててくれたことに喜んでいるのか、少し興奮しているようだった。

「大阪万博のテーマソングを知っているよね。」

「もちろん、大ヒットしましたから、知っています。三波春夫の『世界の国からこんにちは』ですよ。」

「そうだ。歌詞から分かるように、この歌には日本を世界にアピールしたい気持ちが込められている。」

「外国の方に来ていただき、日本をもっと知ってもらいたいからですね。物価も高いし、日本には魅力が少ないのが残念ですが…。」

「そうだね、1970年には日本が魅力的な国だと思っている人は少なかった。ただ2025年には、物価も安くなり、むしろ外国人観光客が増えすぎたことが問題になっている。衣食住どれも日本的なものは好まれている。特に食については世界的だよ。」

「国際的な目はずいぶん変わったのですね。」

「世界が日本を発見したというような感じかな。君も日本に暮らしていることを幸せだと思ったほうがいいよ。」

「分かりました。」

とHK君は素直な返事をした。

「大阪万博には何回か行ったが、アメリカ館の月の石を見た記憶がある。時期的に夏だったと思うが、君はもう見たのかな。アメリカ館はすごい人気で待ち時間が長かったとの記憶があるのだが…。」

「先週見ました。ゲートが空いてから急いで並んだのですが、それでも2時間は待ちました。」

「暑さはどうだった。炎天下だった気がするが…。」

「晴れの日で待ち時間は長かったけれども、暑さはそんなに大変じゃなかったです。いつも通りでし

たから…。」

というHK君の答えを聞いて、HK氏は1970年当時の生活を思い出していた。

HK氏は、当時日本で増えつつあったマンション住まいだったが、家にはエアコンは無かった。夏の夜は陸風が吹き、風通しも良かったので、エアコンが無くても全く問題はなかった。一方2025年の夏は『1970年のいつも通り』の暑さとは言えなくなっていた。

突然、HK君から、

「おじいさん」

と呼びかけがあった。『おじいさん?』本人なのと思ったが、向こうからすればそれが自然なのだろう。確かにふさわしい呼び名がない。HK氏は『こちらは何て呼びかければいいのか。Kと名前を呼ぶのは何かすぐったいし…。君でいくしかないか。』と考えていた。

「おじいさん。そちらの夏は暑いのですか?」

「暑いよ。こちらでは『暑さで死ぬ。』ということが普通になっている。」

『暑さで死ぬ。』なんて考えたこともないですね。」

「雨の量も半端なく多くなっているよ。局地的で予測が難しい『ゲリラ豪雨』なんていう言葉もできたからね。」

「なぜ、そんな問題が起きているのですか?」

「簡単に言うと、人間の活動が活発になるとエネルギー源として石油や石炭が燃やされ、二酸化炭素炭素が大量に発生する。」

「二酸化炭素が問題なのですね。」

「うん。二酸化炭素は太陽の熱をため込むので地球が暑くなる。温室効果ガスと言われている。」

「地球が温室になるということですか。」

「それで、海も熱くなるので、大量の水蒸気が発生し大雨も降るし、台風も巨大になる。」

「それは大変ですね。」

1970年では、環境問題とは公害問題であり、『地球環境問題』というような意識は、まだ一般には浸透していない。

「地球温暖化、いや地球沸騰化ともいわれている。脱炭素はすぐに対応しなければならない大問題になっている。」

「災害も増えるのですね。」

HKが口にした『災害』という言葉からHK氏は神戸で起きた大災害を思い出し、話の内容を急展開させた。

「そうだ。ところで災害といえば、1995年だから25年後か。25年後の神戸で巨大な地震が発生し、君が今住んでいるマンションも倒壊することになる。」

「エーッ!?!」

とHK君は仰天したが、これは当然の反応であった。HK君の激しい驚きように、『まずい。口を滑らせてしまった。』とHK氏は慌てて、

「君はその時、千葉に住んでいるから大丈夫だ。」

とフォローした。

「けれど、父と母はどうなります?」

「多少怪我をしたけれど、命には別条は無いので心配することはない。」

「そうですか。少し安心しましたが…。」

とHK君は多少不安交じりの返事をすると、突然、堰を切ったように、

「それでは、僕の今後について聞きたいです。大学には合格できますか? 将来、どんな仕事に就くのでしょうか? 僕の未来はどうなるのでしょうか? 明るい未来ですか、暗い未来ですか?」

と畳みかけてきた。

至極当然の反応である。誰でも自分の未来は知りたい。ただ良い未来の場合、安心してしまい努力を怠るかも知れないし、悪い未来の場合、悲観してより暗い生活を送ることになるかも知れない。ま

た未来を伝えると本人だけでなく、歴史自体を変えてしまうことになりかねない。そうすると、未来の私にも影響を及ぼすことになる。そこでHK氏は心を鬼にして、

「申し訳ないが、未来が変わる可能性があるんで、未来を教えることはできない。」と拒否した。

HK氏は、つい調子に乗り、少し踏み込みすぎた話になったことを後悔していた。これ以上はお互いにとって不幸になる。『上から目線になるが、人生の先輩として伝えておきたいことはある。それを話すだけにして、もう通話は終わりにしよう。』と気持ちを切り替えた。

「未来は知らないほうがいい。ただ努力はしたほうが良い。」

その人が置かれた環境や運の影響も大きく、不遇の人間も多数見てきたので、HK氏は『努力は報われる。』とか『努力は人を裏切らない。』などと言い切ることができなかった。

「努力は必ずしも報われるわけではないが、適切な努力をすれば、報われる可能性を上げることは間違いないよ。」

とHK氏は付け加えた。続けて、

「それから、処世術になるが、『女も男も愛嬌と度胸』だよ。」

「『女は愛嬌、男は度胸』と言われてますが…。」

「それは古い価値観だよ。性差に関わる考え方は大きく変わる。愛嬌には『親しみやすさ』、度胸には『覚悟』などが含まれる広い意味と捉えてくれ。」

「分かりました。」

「愛嬌のほうでは、『笑顔は最強』。度胸のほうでは、行き詰ったら『最後は開き直り』だ。」

とHK氏は強調した。そして、

「それから、『生き残るものは変化できるもの』、これはDarwinの名言だ。」

「進化論のDarwinですか？」

「そうだ。生き残るものは、強いものや賢いものではなく、変化できるものということだ。個人だけでなく組織にも当てはまるよ。成功体験から変化をためらい、衰退してしまう組織は非常に多い。」

ただHK氏は、1990年以降、日本という組織が1960年代～1980年代の高度成長・安定成長の成功体験から改革を怠り、1990年代以降、経済低迷を続けた失われた30年のことは黙っていた。

「そのためには、変化を厭わない勇気や何でも吸収できる柔軟性が必要だよ。異なる意見の尊重や異文化との接触も重要だ。」

「変化を『チャレンジ』と考えてもいいですか？」

「もちろんだ。チャレンジするという意味で捉えても問題ない。」

HK氏はなおも続けた。

「今15歳だよ。『自分の使命を探してほしい。』この世に生を受けた以上、自分の生き様を見つけてほしいということだ。君もそういうことを意識したほうがよい年齢になっている。」

「好きなことをやりたいという人もいると思うのですが…。」

「もちろん、考えた結果、好きなことがやりたいということであれば、それはそれで良い。考えることが重要なんだよ。」

「はい。分かりました。」

「世の中、偶然で成立していると考え人は、社会的な使命を探求することになるし、一方、何らかの運命で決まっていると考える人は、天命について自問することになる。絶えずではないにしても、時々、原点に戻り、道を外していないか自らチェックしてほしい。」

「大人になるのは大変ですね。」

「ハハハ、そうではない。」

とHK氏は高笑いし、言葉を続けた。

「悪知恵は付いたけれど、頭の中は15歳の君とほとんど同じだよ。自分的には、ほとんど成長していないと思っている。外見は老けるけど、中身はほぼ君のまま70歳になると考えてよい。」

「お年寄り、仙人のように、良い意味ですが…、枯れていくと思っていました。」

「そんなことはない。高齢者は、体力は落ちているので、若い時のようにエネルギーッシュではないが、いろいろな欲望については、そんなに変わらない。」

「お年寄りの認識が変わりました。楽しみもそれなりにあるということですね。それでは、おじさんは、楽しい生活を送るために、どのようにされてきたのですか？」

「楽しい生活には、大きな楽しいイベントももちろんだが、日常的に遊び心を持つことも意味があるような気がするな。」

「遊び心？ 日常的に？」

「そうだ。高校生活を例にすれば、修学旅行とか体育祭とか、楽しい大きなイベントは、そんなにあるわけじゃない。むしろ日常の中での遊び心や小さな楽しみが重要だと思う。例えば、通学の時に時々見かける知らない人のプロフィールを想像するとか、本当はやっちゃいけないが教科書の端にパラパラ漫画を描くとか…。」

「そうですね。」

「社会に出ても同じで、日常的な仕事でも楽しみは作れるよ。私の場合は、依頼された原稿などに遊び心を加えて物語風に仕上げるなんてことをよくやっている。『不意苦笑』というタイトルを付け、シリーズ化しているが、作り話の意味の Fiction を漢字で表記し、一方、最後の一文で落とす、すなわち『不意に苦笑する。』という意味を込めているんだ。一種の言葉遊びだよ。」

「『落とす。』って何ですか？」

「落語のオチのようなものだよ。」

「そうですね。オチを入れることも遊び心の表れですね。」

「そうだ、分かってくれてありがとう。」

HK 君に理解してもらえたようだったので HK 氏は相好を崩し、なおも続けた。

「それから、これが一番言いたいことだが、『場合によっては、頑張るな。』だ。」

「頑張らない？」

「そうだ。心身の疲労時には、とにかく休養をとることが大事だよ。頑張りすぎて心身の不調に陥ることは、全くの無意味だ。心身の強さを過信しないことだ。」

「分かりました。」

「君の返事は素直でいいな。素直は君の取り柄だからな。」

HK 氏は口も滑らかで気分が良く、HK 君とはもっと話をしていたかったが、この辺りで収めるべきだと判断した。『起承転結。もう一度、最初の話題に戻って通話を収めよう。』と決め、

「これで話は終わりにしよう。最初にチキンは絶対食べないという話があったよね。理由は言えないが、いずれ食べられるようになるよ。」

という話題に切り替えた。

「そうですね。食べられるようになるとは思えませんが…。」

HK 氏が大学生になってから、チキンに関わるエピソードを伯母から初めて聞いた。その内容は、当時 HK 氏はチキンが好物だったので、HK の 4 歳の誕生日に、伯母が奮発して、鶏の丸焼きを出したところ、それを見た HK が『気持ち悪い。』と大泣きしたというものだった。そのときの記憶は無くなっていたが、そのとき感じた強い拒否感だけが残り、おそらくそれを境にチキンが食べられなくなったのであろう。このエピソードを聞き、チキンを拒否する原因が分かったことで、その後はチキンが食べられるようになったのである。

それから、最後の最後に『これだけは言っておきたい。』ということが脳裏に浮かんだ。

年齢を重ねると、目は悪くなるし足腰も弱る。これらは仕方がないとしても、奥歯が入れ歯になってしまったことをいささか後悔していた。『毎日、きちんと歯磨きをしていれば、入れ歯は避けられたかもしれない。』と思い、HK 氏は、HK 君に最後の助言をした。

「毎日、チキンと歯磨きをすること。」